



TITLE:

<雜錄>關老爺

AUTHOR(S):

日比野

---

CITATION:

日比野. <雜錄>關老爺. 東洋史研究 1941, 6(2): 138-138

ISSUE DATE:

1941-04-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/145733>

RIGHT:

窺はれる。委曲を盡せる叙事、典雅な文章も、この地理書の構造のために一層輝きをみせてゐる。

道元は情理兼備へ、清濁併呑む底の人ではなかつた。どこまでも理の人であり、清の人であつた。魏書

は彼の傳を酷吏傳に列してゐる。穢史とまで稱せられる魏書であるから、それによつて彼を酷吏と評することは不當ではあらうが、執法清列、爲政嚴猛であつたことは事實であらう。この純清な理知的な性格は彼の官吏生活を決して幸福にはしなかつた。終にそれが禍

して陰盤驛に於て凄愴な臨終を遂げたのである。しかしその地理學に於てはこの清理の性格が見事に結實して獨立不羈の存在たらしめたのである。

### 參考文獻

趙一清、北史本傳釋(水經注釋卷首)

山丁、關學考叙目(中央研究院歷史語言研究所集刊三本三分)

趙貞信、關道元之生卒年考(禹貢半月刊三周年記念號)

(昭和十六年二月二十五日稿)

### 關老爺

京都の東山の極樂寺、といつても知つてゐる人は多くあるまい、その代り眞如堂のことだといへば何のことだと領づく人は少くないだらう。その表門通りの北に四つ程寺が並んでゐる。四つとも丁度同じ位の大きさをしてゐるものだから俗に四軒寺とも呼んでゐる。その中の何番目だつたか忘れたが東北院といふ寺に關帝廟があるのだ。この寺は境内に萩が多く秋には美しい花が庭一面に咲くので萩の寺ともいはれるところだと思つてゐる。たしか雍州府志であ

つたと思ふが、東北院に關白道長公の木像ありとして、この寺と道長との關係を随分長く説明してあつたのを読んだことがある。恐らくさういつた關係は事實あつたのであらう。しかし現に寺には關羽の像をまつた一棟の建物があつて他に道長の像らしいものもないから、雍州府志の記事は必ず關帝に關白道長をこちつけたものた違ひない。實は残念ながら私はまだその東北院の關帝像を拜見したことがないので何ともいへないが、柱にかゝつた煤ぐらい關帝云々とあつた表札からみて、きつとあ

の恐い顔をして黒い髯を垂らした關老爺であらうと思つた。寺の人にきくと十一月のいつとかに一度御開帳があるとのことであつた。支那ではあんなに何處にでもあつて、民衆に親しまれてゐる關老爺が、たま／＼珍らしくも京都に來られると、御堂關白となりすまし年に一度しか顔をお見せにならないのかと思ふと、何となく苦笑を禁じ得ないではないか。この關老爺廟の抑々の本家本元である山西解州の關帝廟へ行つてこんなことを思ひ出した。

(日比野)